



## 大八洲開拓史に寄せて

日本高等国民学校長 加藤 彌進彦

大八洲開拓農協の佐藤孝治さんから大八洲開拓史を刊行するに当たって、その序文を書くことを依頼された。元よりそのような大役は私の任ではないが、そのときふと私は、もし父完治が存命であったならば喜んで引き受けたであろうにと思ひ、又満洲で大八洲のお世話をした野々山先生も、国内開拓のお世話をした江坂先生も既に故人となってしまうことを考え、佐藤さんの心中もお察しして、任にあらざと知りながらお引き受けをした。

私が佐藤さんを知るに至ったのは、昭和三十九年私が日本高等国民学校の校長となつてからのことである。それまでは福島県西郷村にある白河報徳開拓農協の組合長をしていたので、国内開拓では同志の立場ではあつたが、私が自分の組合の建設に専念しておつたため、大八洲開拓農協のことについては詳しいことを知らなかつた。このたび佐藤さんからお預りした貴重な原稿を読ませていただいて、初めて、同組合がこれまでに歩んで来た歴史と、そこに一貫して流れる立派な開拓精神に共感の念を深くすると共に、溢れ出る涙をどうすることも出来なかつた。

満洲における大八洲開拓が築き上げた新しい村は、この書に収められた貴重な写真や記録が示すように、人の和を中心にして、理想的な村づくりを着着と進めていたのであるが、敗戦という悲惨な事態によって惜しくも挫折してしまつた。もしも敗戦がなく、あの村づくりがそのまま進んでいたら、恐らくそこには人類が願う、本当に明るい豊かな理想社会が建設されたであろうし、それは独り大八洲開拓のためばかりでなく、満洲建国の理想にも、あるいは広く人類の理想

のためにも大きな貢献をしていたものと私には確信されるのである。思えば残念の限りである。そしてその後になる引き揚げの苦難と悲惨は全く申し訳ないことであって、犠牲となられた方方の御霊に、又遺族の方方に謹んで哀悼の誠意を捧げるものである。

この苦難をのり越えて引き揚げられた団員は、一致団結して再度の開拓、国内における大八洲開拓の建設に邁進された。たまたまこの入植地が水害の常習地であるために、水害による幾多の苦難を受けるのであるが、団長を中心に共同の精神と適切な処置によって切り抜けて来たのである。その旺盛な開拓精神には全く頭の下がる思いがする。過日私は大八洲開拓を訪れたが、ここがかつての水害常習地であったとは想像も出来ない美田が展開していた。しかも佐藤団長が「ここでは後継者問題はありませんよ」と自慢されるように、どの農家にも若い後継者があって農家の中心となって働いていた。佐藤さんは開拓の終局の理想は、人づくりにあるという理念を掲げているが、このことが大八洲開拓の今日を築いたものと、深く敬意を表する次第である。

大八洲開拓の将来がどのように発展してゆくかは、後継者の努力に負う以外にないであろうが、私はこの開拓地に多数の卒業生をもつ学校の責任者として、本書の刊行を心から喜ぶと同時に、本書を通じて大八洲開拓の意義を正しく認識しておくことが如何に大切であるかを痛感した。佐藤さんが私に序文を依頼されたのも、このことを期待しておられるのかも知れない。

それはともかく、この組合が今日まで歩んで来た歴史は、そのまま尊い教育であり、その歴史を正しく伝える本書は何ものにも勝る教材である。私は本書が大八洲開拓の聖典となつて、末永くその後継者達に愛読されることはもちろん、広く全国の農村青少年にも読まれることを期待したい。

昭和四十九年二月